

《書評》

『イスラーム主義：もう一つの近代を構想する』

末近浩太\*著、岩波書店、2018年

山本健介†

「待望の書」——書物を評する場で頻繁に口にされる常套句だが、本書はまさしくそれである。本書の主題であるイスラーム主義とは、「平たく言えば、イスラームに依拠した社会変革や国家建設を目指すイデオロギー」(2頁)のことである。イスラーム主義の思想や運動への理解が、現代世界を把握する上で必要不可欠になっていくなか、その動態を体系的に説明する書籍の刊行を多くの人が待ち望んできた。これに応え、時宜を得て刊行された本書は、中東政治や現代イスラームに関心を持つ全ての人に長く読み継がれていくことだろう。

評者が「待望の書」と感じた背景には、客観的な視点からの評価だけでなく、評者自身の経験に根差した事情もある。現在、評者は、中東地域研究のなかでもパレスチナ問題を専門としているが、かつてはイスラーム主義運動に強い関心を抱いていた(大学院進学時の研究計画書も、イスラーム主義組織の社会福祉活動に関するものだった)。それは、評者が学部の3年生だった2011年に「アラブの春」が起こったことにも関連している。本書でも描かれているように、「アラブの春」後の中東地域においては、「政治と宗教の関係」や「あるべき秩序」といった問題があらためて問われるようになり、その観点からイスラーム主義の思想や運動に大きな注目が寄せられた。日本の新聞紙上でも「ムスリム同胞団」といった現地組織の呼称が日常的に目に付くようになった。大学卒業後の進路を考える時期に差し掛かっていた評者の関心は、自然とイスラーム主義に向けられた。

その頃に直面した悩みは、何と言っても日本語で読むことのできる書籍が少なかったことである。誤解を避けるために言うておくと、日本においてもイスラーム主義に関連する良質な研究書や論文、原典翻訳などはいくつも出されていた。ただし、特定の国や組織に関する詳細な研究がある程度蓄積されていた一方で、それらを俯瞰し、イスラーム主義の思想や歴史を総合的に論じるものは数えるほどしかなかった。このような約10年前の境遇をあらためて思い出してみると、本書の刊行は画期的であると言うほかないのである。

本書の著者は、立命館大学国際関係学部教授の末近浩太氏である。著者は、長年にわたって、イスラームと政治に関わる研究に従事しており、これまでも『現代シリアの国家変容とイスラーム』(末近, 2005)や『イスラーム主義と中東政治:レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』(末近, 2013)

---

\* 立命館大学国際関係学部教授

† 日本学術振興会特別研究員 PD  
kensuke100percent@gmail.com

© 立命館大学アジア・日本研究所

『立命館アジア・日本研究学術年報』2020, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.1, pp.160-163.

といった単著を上梓してきた。本書は、著者がこれまでに行ってきた堅実な実証研究の上に成り立っており、「ソフトな専門書」ないしは「ハードな概説書」を目指すという著者の目論み通り（岩波書店編集部，2018）、読み応えのある新書に仕上がっている。

本書では、イスラーム主義の定義や、議論全体の前提について確認する第1章を経て、第2章以降で、イスラーム主義と中東政治の変遷が時代順に論じられている。そして終章では中東と世界の今後を見据えた議論が展開される。本書の内容は、19世紀末からのイスラーム改革主義（第3章）、ムスリム同胞団やダアワ党の来歴（第4章）、イラン・イスラーム革命（第5章）、ジハード主義・武装闘争（第6章）、イスラーム政党（第7章）など、実に盛りだくさんであるが、近代以降の「長い帝国崩壊の過程」（第2章）という一貫した問題認識のもとで論点が整理されており、全体を一つのストーリーとして理解することが可能になっている。

本書は、新書という形でありながら、世界的に隆盛するイスラーム主義研究の一つとして十分に価値を持っている。以下では、本書の評価と関連する議論の特徴として次の二点を取り上げておきたい。

本書の特徴の一つは、オスマン帝国の崩壊を契機として生じた「あるべき秩序」の模索、すなわち「政治と宗教の関係」をめぐる論争を中軸に据えて、イスラーム主義を捉えていることである。例えば、第2章「長い帝国崩壊の過程」においては、「中東の人びとにとって輝かしい未来を約束するのは、西洋的近代化と軌を一にする世俗主義なのか、それとも宗教に基づく社会と国家の再編を目指すイスラーム主義なのか。二つのイデオロギーは、それぞれ異なる道を示しながら、『帝国後』の時代の中東の『あるべき秩序』を模索する大きな思想潮流となっていった」（30頁）と述べられている。さらに、終章でも「アラブの春」後における中東政治との関連で、以下のような記述が見られる。「中東の政治の趨勢がイスラーム主義に大きな影響を与えると同時に、イスラーム主義が中東のあり方を大きく変えてきた。それは、オスマン帝国の崩壊から100年を経とうとしている今日においても、『帝国後』の時代の『あるべき秩序』の模索が継続している証でもある」（192頁）。とりわけ、「アラブの春」後のイスラーム政党の躍進について、「イスラーム主義者が示す『あるべき秩序』を支持する人びとが数多く存在することが、あらためて明らかになったのである」（161頁）と捉えている点は、著者のオリジナリティを感じさせる。

オスマン帝国の崩壊やイスラーム改革主義の動きは、イスラーム主義に関する書物の多くで取り上げられているものの、それが現代のイスラーム主義運動を捉える上での単なる歴史的な背景に矮小化されているケースも少なくない。本書は、イスラーム主義の紆余曲折を意識しながらも、「長い帝国崩壊の過程」における一貫した論点として「政治と宗教の関係」を捉えている。その意味で、20世紀初頭の「帝国崩壊」は現代の課題に直接結びつくものとして想定されていると言える。

著者は、末近（2005）においても、「未完の物語」としての「シリア分割」（＝歴史的シリア地方における国民国家群の形成）という概念を導入し、オスマン帝国の崩壊から現代までを結び付けてアラブ諸国の政治的動態を理解しようと試みた。「帝国崩壊」を起点とした中東・イスラーム政治論という点で、末近（2005）にも本書と通底する問題意識のあり方を読み取ることができる。

本書での議論が持つもう一つの特徴は、イスラーム主義の多様な実態を強調する点である。これは、なによりイスラーム主義の定義に関わる記述から明らかである。まず、著者は、「現代の中東における政治と宗教の関係を考えるためには、政治に『国民国家内の権力闘争』と『国民国家自体の相対化』の二重の意味を読み込む必要がある」（10頁）と述べ、「イスラーム主義は、ある国民国家

の内部で生じる権力闘争をかたちづくる一要素である半面、国家や政治共同体の存立基盤それ自体の見直しの契機を含むこともある」(11頁)と指摘する。これらを踏まえて、イスラーム主義は「宗教としてのイスラームへの信仰を思想的基盤とし、公的領域におけるイスラーム的価値の実現を求める政治的なイデオロギー」(2頁)と定義されている。ポイントは、イスラーム主義の定義において、その目標を、現行の国民国家内での国家権力の奪取に限定しない点である(11頁)。このような幅広い定義は、末近(2013)においても示されており、同書では、レバノンのシーア派イスラーム主義組織であるヒズブッラーが多岐にわたる活動を展開していく姿が描かれている。

イスラーム主義に対する上記のような特徴付けは、本書の終章で言及されたポスト・イスラーム主義論との関わりにおいて特に重要性を持つ。ポスト・イスラーム主義は、論者によって様々な定義されてきた。まず、イスラーム主義研究者であるオリヴィエ・ロワは、イスラーム主義運動が、イスラーム国家の樹立に失敗してきたことで、私的領域における「再イスラーム化」へ重心を移していったと述べ、この動きをポスト・イスラーム主義と呼んでいる。これについて著者は、1990年代以降のイスラーム主義組織が、「国民国家や民主主義を尊重し政党活動を行いながらも、草の根の社会活動や武力による抵抗運動を通して、公的領域における『イスラーム的』の実現を理想として掲げ続けている」(203頁)と指摘し、ロワの視野が狭窄であることを問題視する。ここでは、著者が「政治」に二つの意味を読み込んだことがロワへの批判として大きな価値を持つてくる。

他方、ポスト・イスラーム主義論を展開するもう一人の研究者アーセフ・バヤートは、ロワとは異なる定義を与えている。彼にとって、ポスト・イスラーム主義とは、イスラーム主義が訴求力を失いつつある今日において、「もう一つの近代」を実現すべく、イスラームと、個人の選択や自由、すなわち民主主義や近代性とを結び付けようとする営みを指している。バヤートは、ロワのように不可逆的なプロセスを想定しているのではなく、イスラーム主義の経験とは質的に異なる言説の誕生として、ポスト・イスラーム主義の登場を捉えている。

著者は、このバヤートの指摘自体には概ね賛同している。だが、その一方で、「ポスト・イスラーム主義は、多様性と変化を絶えず見せてきたイスラーム主義の今日的な一形態に過ぎず、わざわざ『ポスト』と名付け区別する意義が薄弱になる」(204頁)とも述べている。この点で著者は、どちらかと言えば、イスラーム主義を幅広く捉える姿勢にこだわりを見せ、ポスト・イスラーム主義に関わる議論から若干の距離を置いている。言い換えれば、ポスト・イスラーム主義論を唱える二人の論者に対して、むしろ「イスラーム主義」自体を精察しなおすべきであると主張しているように思われる。この点は、長年イスラーム主義の実証研究に取り組んできた著者だからこそ提起できる問題であろう。

イスラーム主義研究の最先端の知見をコンパクトにまとめた本書の価値は計り知れない。このことはいくら強調してもし過ぎることはないだろう。その上で、本書の刊行を受けて我々に求められるのは、本書を「決定版」にしてしまうことではなく、これを一つの契機として、異なる角度から様々な「イスラーム主義論」を生み出していくことではないだろうか。論者の専門や視点が異なれば、そこで描かれるイスラーム主義の趣も異なったものになりうる。例えば、東南アジアのイスラームを対象とした研究者やジハード主義の専門家などが「イスラーム主義論」を展開した場合には、本書と同様の事例を挙げていたとしても、力点やロジックに違いが出てくるだろう。そうして研究の裾野を拡げていくことが、イスラーム主義の「複雑で豊かな現実」を描き出すことにも結びついて

いく。これこそ、著者自身が本書で再三にわたって強調してきたことである。本書の刊行が新たなイスラーム主義研究の「起爆剤」となることを期待して、筆を置くこととしたい。

#### 参考文献

- 岩波新書編集部(2018)「末近浩太さん『イスラーム主義——もう一つの近代を構想する』」<https://www.iwanamishinsho80.com/post/mo-jin-hao-tai-san-isuramuzhu-yi-mouyi-tunojin-dai-wogou-xiang-suru-1> (2019年12月17日閲覧)
- 末近浩太(2005)『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版。
- (2013)『イスラーム主義と中東政治：レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』名古屋大学出版会。